

形断意連

藤 森 大 雅 (大 節)

Hironasa (Daisetsu) Fujimori

本作は行草書で半切二行書きの形式に連綿を使用しない単体で表現することを試みたものである。

漢字では行書や草書、そして仮名に用いられる連綿は、王羲之、王献之の行草書あたりから見られるようになる。卷子や長条幅といった書式の発展とともに用美を兼ねた行草書が盛行し、その中で連綿の効果は流れやリズムを演出できるだけでなく、連綿線そのものが文字の一部、時にはそれ以上の意味を持つこともあり、さらには単体では表現しえなかった文字群としての視覚的效果を生むなど、こうした表現は宋代以降多用されていき、連綿は行草書に欠かせない表現方法の一つとなった。

反対に連綿を使用しない場合であっても筆意の連貫、いわゆる意連が重要である。虚画に意味を持たせるための工夫は欠かせず、書表現としては連綿(形連)よりも意連の方が難易度は高いと言えるだろう。そこで稿者は「文字の大小」「字形の変化」「字間のとり

方」の三点から「形断意連」による作品制作にあたった。

草稿を作成するにあたり、次の内容に留意した。一行目の「半」「山」「色」「一」、二行目の「雨」「中」は小さく、その他は大きめにして、二行目の「香」「帯」を強調するために一行目の表現は抑える。それを受けて、上下の文字に関連性を持たせるため、文字の概形を変化させ、最もスムーズな流れを演出できる組合せを探った。各行の流れを効果的に見せるため、天地、行間の余白はやや広めにとり、字間も最も自然な距離感を意識して配字した。

この草稿をもとに、墨の潤濁、線の肥瘦、粗密にも留意して試作を繰り返した結果が次頁掲載作である。草稿時のイメージにある程度近づけることができたと感じているが、一、二行目の書き出し二文字が左右に並んだため平凡になり、二行目後半の「雨」を右に広がる字形にしたため、「形」のみならず「意」も断たれてしまった。



半窓山色來雲外，一枕荷香帶雨中。

135×34cm